

鹿屋体育大学 教員紹介

堀内雅弘 教授（研究指導担当教員）

・研究キーワード

運動生理学、環境適応、体温調節機能、脳循環、血管機能

ヒトは、様々な外的環境に適応していかないといけません。例えば、夏の暑熱、登山中の高所（低酸素）などが挙げられます。一方、これらの過酷な環境に適応できるようになり、さらに長時間運動できるようになることは、体温調節機能や持久的体力の向上にもつながります。現在は、主にこれらの適応メカニズム解明を研究しています。これらの研究成果は、より安全に運動やスポーツを行うための効率的なトレーニング方法や熱中症対策を確立する一助となりえます。

北村尚浩 教授（研究指導担当教員）

・研究キーワード

レジャー・レクリエーション、生涯スポーツ学、スポーツ社会学

スポーツ社会学、生涯スポーツ学、レジャー・レクリエーション学が専門です。10年ほど前から、武道の文化的側面と中学校での教育効果について研究しています。

永原隆 教授（研究指導担当教員）

・研究キーワード

スプリント走、トレーニング、コーチング

私は、バイオメカニクスや運動生理学、体力測定などの方法を用いてトレーニング科学の研究を行っています。私の研究では、主にスプリント走について、多角的に分析しています。特に、加速局面を一步ごとに分析するアプローチで研究を実施し、スプリント走のメカニズムやスプリント走パフォーマンスの決定因子について明らかにしています。

石原豊一 准教授（研究指導担当教員）

・研究キーワード

スポーツと開発、スポーツ労働移動、スポーツ社会学、スポーツ史学

私はアカデミアの世界では元々、アフリカをフィールドとして多言語主義とエスニック・アイデンティティを研究しておりました。その後、スポーツ社会学に転向し、アスリートの国際移動を博士論文のテーマとしました。その中で、開発援助活動の中から途上国から野球選手として日本に渡るスポーツ移民の事例に触れ、「スポーツ国際開発」を自分の研究リストに加えた次第です。途上国発の「プロ野球選手」は果たして「途上国の貧困」を救う方策となりえるのか？それを皆さんと一緒に探っていけたらと思っています。

国重徹 教授（授業のみ担当教員）

・研究キーワード

英語教育、多読、異文化理解、メディアトレーニング、アカデミックプレゼンテーション

私は主に多読・多聴による効果的な英語学習プログラムの開発について研究をしております。また、異文化理解や異文化コミュニケーションの重要性や課題、アスリートが英語で適切なメディア対応をできるようにするためのトレーニングプログラムの作成、学生がスポーツ科学分野の研究内容を英語でプレゼンテーションできるようにするための有用な指導方法に関する研究も行っております。本専攻では、Intercultural Exchange and Communicationという授業を、石原先生、ヨーコ・ゼッターランド先生とで担当します。スポーツ国際開発の推進に必要な異文化交流・コミュニケーションの問題について共に考えましょう。

隅野美砂輝 准教授（授業のみ担当教員）

・研究キーワード

スポーツ経営学

私の研究領域はスポーツマネジメント、中でもスポーツマーケティングや、スポーツ観戦者の消費行動研究を専門にしています。スポーツ国際開発学とは異なる分野ですが、スポーツを通じて国際開発活動を行なっていく際には、スポーツマネジメントやスポーツマーケティングの仕組みを利用する機会もきっとあるはずで、スポーツには世の中を良い方向に変える大きなチカラがあります。そのチカラをどのように生かしていけば良いか？スポーツ国際開発学共同専攻を通じて学んでいきましょう。

中村勇 講師（授業のみ担当教員）

・研究キーワード

国際武道論、柔道

柔道の国際普及現場での経験を生かし、武道、特に柔道の普及史や国際化を研究しています。日本文化伝播論の授業を担当。日本の伝統文化に海外がどのように反応し、受け入れてきたのか、武道、特に柔道の国際化の事例を通して検証します。明治維新の30年後、パリの目抜き通りやアメリカホワイトハウス内に武道道場ができた経緯やその後の展開、伝統を守りつつ国際普及を進めることの困難さなどをディスカッションしながら学んでいきます。

棟田雅也 講師（授業のみ担当教員）

・研究キーワード

スポーツツーリズム、スポーツまちづくり

私の研究領域はスポーツマネジメントであり、特にスポーツイベントやスポーツツーリズムを専門としています。スポーツを通じた国際開発や社会貢献を実践していくうえでは、スポーツの価値を生み出し、持続的な活動へとつなげていくためのマネジメントの視点が重要です。スポーツが社会にどのような価値をもたらし、その力をどのように地域や人々の未来につなげていけるのかを、皆さんとともに考えていきたいと思います。